



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.235
2023.4.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

心に残る 先学の人生記録 —読書日記から— 大村 裕

第33回

民俗学者・渋沢敬三の「夢」 (その1)

渋沢敬三(1896~1963)は、卓越した経済人であり、また優れた民俗学者である。その人格と識見については、彼の愛弟子の宮本常一が『民俗学の旅』(講談社文庫 1993年)において興味深い証言をしているが、ここでは①由井常彦・武田晴人編『歴史の立会人 昭和史の中の渋沢敬三』(日本経済評論社2015年)と②渋沢雅英『父・渋沢敬三』(実業之日本社 1966年)の中から、渋沢が心の中にしまっていた「夢」を2回にわたって探ってみることにする。ちなみに、①は上記の編者のほか、木村昌人・伊藤正直・浅井良男が経済人としての敬三の歩みや彼の学問・思想などについて多角的に掘り下げている。②は敬三の長男・雅英による「人間・渋沢敬三」の伝記である(以下「伝記」と略称)。

渋沢敬三は日本資本主義経済の父・渋沢栄一の嫡子・篤二の長男として東京の深川で生まれる。父・篤二は多才な趣味人であったが、実業には関心が薄い上、健康がすぐれなかったという。そのため、祖父・栄一は孫の敬三に期待するところが大きく(後年、息子の篤二を廃嫡してまで敬三を後継者にしている)、優れた教師陣がそろっていた東京高等師範学校附属中学に入学させたのであった。この学校は、エリート育成を目的に開設されたもので、各分野の少なからぬ学者・研究者(生物学者・丘浅次郎等)が授業や学習指導にあっていたという。また学校の外では、かの諸橋轍次に国語・漢文の個人的指導を受けていたというから、大学の専門課程レベルの授業を10代半ばで受けていたことになる。旧制高等学校進学に当たっては、丘浅次郎の感化もあってか生物学を専攻すべく、理科を志望したが、祖父はこれを許さず、渋沢家の家業たる第一銀行の経営者として学業を身につけるように説得され、文科甲類に入学することになる。ちなみに祖父・栄一は、敬三の進路について強圧はせず、ただ頭を下げて「頼む」とだけ何度も何度も懇願したという。後年敬三は、「七十いくつかの老人で、しかもあれだけの人に頼むと言われるとどうにも抵抗のしようがなかった」と息子の雅英に語っている(伝記)。そのような経緯もあってか、仙台の旧制第二高等学校では、講義に出席する意欲が乏しく(ただし、「落ちこぼれ」ではない。親友の土屋喬雄は、教室であまり見かけない敬三の、あまりの博識・博学ぶりに敬服している)、東北各地への旅に出たり図書館で動植物や民俗学の本を読んでいたりしたという。新制大学の教養課程レベルの講義には魅力を感じなかったことも理由の一つであろう。東北各地への歴訪では、農村において、関東では見られない江戸時代以来の伝統的な農作業や農具・祭事などに接したことで民俗学に関心を深めて行く。これが終生の民俗学研究との出会いであった。

1918(大正7)年、敬三は東京帝国大学法科大学経済学科(翌年経済学部)に進学する。当時経済学部は、社会主義や社会問題の研究にも熱心な「進歩的教官」がいた(労働問題に熱心な高野岩三郎、マルクス経済学者の大内兵衛等)。渋沢は、この方面への関心があったので、

エリートコースたる法学部ではなく、あえて経済学部を選んだと述懐している。マルクスの『資本論』にも深い関心を示していたようだ。資本家階級に属していながら、日本の資本家に対して批判的であったらしいので、戦後大蔵大臣になったとき、GHQによる怒涛のような「民主化」要求に対し、比較的柔軟な対応が出来たのではないかと推察される。

1921(大正10)年、東京帝大卒業後、すぐには第一銀行には入らず、「よそで修業すべく」横浜正金銀行に入社。しばらくの間の研修を終えてロンドン出張を命ぜられる。ここで4か年勤務する傍ら、休暇を使ってヨーロッパ各地を巡り、欧州文化・芸術に親しむだけでなく上流階級の人々との親交も深めている。視野の狭い蛸壺型研究者を嫌っていた(木村昌人の指摘)のは、こうした広い視野から学問を眺めていたからであろう。ロンドンから帰国後、正金銀行を退職(1925年)。翌年には第一銀行取締役役に就任している(30歳)。しかし敬三は、「実業に志してはいなかったのに、銀行は大切だとは思いましたが、面白いと思ったことはありません」と述懐している。本人がそう言っているのだから、武田晴人による、「(経済人としての)渋沢さんの仕事を追いかけていくと、(中略)『受け身の対応』に徹しているように見えます」という感想は、おそらく正鵠を射ていると思われる。第一銀行取締役・日本銀行副総裁・同総裁・大蔵大臣の地位はすべて他から強要されたものであったのである。心の底から切望していた研究三昧の生活(「夢」)を封印して、渋沢家と公への義務に生涯を捧げた敬三の気持ちを忖度すると、私は目頭が熱くなって来る次第である。

そんな敬三にとって、伊豆三津浜の旧家・大川家の当主四郎左衛門との邂逅(1932年)は、人生の中で最大の幸運であったろう。この時、敬三は祖父・栄一の死去に伴う過労を癒し、かつは持病の糖尿病の治療を兼ねて同地に逗留していた。そこへ、敬三が日頃世話になっている釣船の船頭・菊地伝次郎を介して大川が面会を請い、数通の古文書を敬三に供覧したのであった。それらを見て敬三は驚愕する。何とそこには、天正18(1590)年に発せられた豊田秀吉の朱印状があったのである。狂喜した敬三は早速大川邸を訪問。土蔵の長持の中や長屋の押し入れの中から、膨大な古文書・帳面・古証文などを発見したのであった。その中には後北条氏の虎印を捺した古文書も数通あった。敬三はこれらが容易ならぬ史料であると直観し、その一部を拝借。投宿先において早朝から深更まで約2か月間、筆写を続けたのであった。大川翁はこのような敬三を見て驚嘆・感動し、祖先伝来の文書を、一切を挙げて敬三に託したのである(伝記)。敬三は、三田の自邸(敷地面積三千坪)内にあった「アチック・ミュージアム」の他に漁業史の研究室を建てる。そして若い有能な研究者を集めて大川から託された史料の整理にあたらせ、『豆州内浦漁民史料』(全4巻)として出版する。この功績によって日本農学会から第1回農学賞を受賞したのであった。(この稿続く)

*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第33回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第228回)	平澤愛里 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第8回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚「続日本先史考古学史の基礎研究」	土井裕介 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第8回)

山本 暉久

8. 大学での考古学 その5 -柄鏡形住居址との出会い-

大学2年生の冬、1967(昭和42)年2月15日～3月25日にかけて行われた横浜市南区日野町猿田に所在する洋光台猿田遺跡の調査に参加した。日本住宅公団(当時)の洋光台団地(現・磯子区洋光台1～6丁目)建設に伴い、櫻井清彦先生が団長となって早稲田大学文学部史学科資料室により調査が行われた遺跡である。調査期間は1箇月を超し、それまでの自身の発掘としては、最も長期間の調査となった。今は、横浜から大船へ抜けるJR根岸線の洋光台駅となっていて、その面影は全く想像できないが、当時、宿舎へは京浜急行の上大岡駅からバスで30分ほどかかり、遺跡は、そこから徒歩で30分ほどの横浜でも山林に覆われた、いわば「僻地」であった。宿舎はプレハブの工事事務所の一角を借りた、いわゆる「飯場(はんば)」で、ここで朝・晩は自炊する生活であった。朝食は、参加した学生が交替で味噌汁や生玉子・納豆などを用意し、夕食は、OGたちの協力を仰いで摂ることができた。だからいうまでもないことだが、食事内容への不満や「不味い!」などと言うことは禁句で、あるときなどはお米が半煮えで、芯の残るガリガリのご飯が出てきたことがあったけれども、みんな、何も云わず黙々と食したこともあった。調査の終盤ころは、私は疲れて寝過ぎてしまい、朝食当番の任が果たせず、先輩にお世話になったこともあった。

そんな思い出がよみがえるが、この調査で私は、貴重な調査経験をする事となった。それは、「柄鏡形住居址」との出会いである(写真参照)。調査担当者の櫻井清彦先生により「柄鏡形の住居址」(「縄文中期の集落跡-横浜市洋光台猿田遺跡-」『考古学ジャーナル』No.7, 1967.4)と命名され、この種の住居址としては初めての発見となった。遺跡は、長軸約180m、短軸約40mの東西に長い半島状の丘陵上に築かれた縄文中期の小規模な集落址で、中期後葉を主体とする13軒の住居址が検出されている。遺跡の報告書は刊行されないままになっているが、この「柄鏡形住居址」の学史的な価値に鑑みて、この住居址に限って、私が調査後26年を経て、ようやく出土遺物を整理して報告した(「横浜市洋光台猿田遺跡発見の柄鏡形住居址とその出土遺物」『縄文時代』第4号, 1993.5)。

その当時、調査に参加した学生たちは、確認された住居址をそれぞれ担当して調査を行ったが、たまたま、私は、第10号址とした、この住居址を担当することとなったのである。住居址の調査に取りかかるさい、「柄鏡形住居址」なる存在には全く認識がなく、小形の円形プランの一部に「イモ穴」と思われる攪乱土

坑が重複しているものと理解して調査を開始した。ところが、調査が進むにつれて、この「土坑」は攪乱などではなく、住居址に付属する施設(「張出部」)であることが判明することとなった。そのことを確信したのは、主体部の壁際を巡る周溝が、この長方形の土坑状落ち込みにも認められたことや、主体部との接続部に埋甕の存在が確認されたことによる。最終的には、主体部は東西約3.6m×南北約4.0mのやや南北に長い楕円形を呈し、長さ約2.6m×幅約1.1mの「張出部」が付設された「柄鏡形住居址」であることが明らかとなった。これまで、「張出部」が付設された住居址は、いわゆる「敷石住居址」と呼ばれる床に石を敷きつめた住居址に顕著であり、敷石をもたない「柄鏡形住居址」の存在は、この調査により初めて明らかになったのである。

なんでも初めての発見というものは、大きな感動を与えるもので、この経験は、その後の自分の研究に大きな影響を与えることとなったことはいうまでもない。のちに、「敷石住居址」と「柄鏡形住居址」を総称として、「柄鏡形(敷石)住居址」と呼ぶことを提唱することとなるが、本格的な研究に取り組むのは、まだ、だいぶ先で、大学院を修了して、神奈川県教育庁に就職して以降のこととなる。そんな思い出深い調査であったが、遺跡をほぼ全掘し、集落の全貌を明らかにできたことは貴重な体験となった。調査は機械力にほとんど頼らず、ひたすら参加した学生たちが人力で掘り進めたもので、体力の消耗も激しかったが、その分、調査成果の喜びもひとしおであった。

大学3年生になり、発掘も数多く経験するようになる。8月の夏休みは、千葉県船橋市高根木戸遺跡の調査に参加した。中期の馬蹄形(環状)集落址で、ほぼ全掘されて集落の全貌が明らかにされた。各大学の多くの学生たちが参加した調査であったが、住居址群に伴って「袋状(フラスコ)土坑」(「小竪穴」)と呼ばれる貯蔵穴群が多数検出された。この種の貯蔵穴を初めて調査したので、オーバーハング(フラスコ状)していることから土坑の下底部に壁がなかなか出ず、調査で大変不安な気持ちになったことを記憶している。12月に入り、神奈川県藤沢市遠藤貝塚の調査に参加した。寺田兼方さん(湘南学園)が担当して行った調査であり、後期前葉・堀之内2式期に形成された貝塚であった。調査の終盤、貝塚の下底面に達したので、ローム面を出そうとして掘り下げたところ仰臥伸展葬の埋葬人骨(4号人骨、壮年・女性)に遭遇し、調査が終了し帰宅したのは大晦日、除夜の鐘が鳴るころであった。



▲横浜市洋光台猿田遺跡10号住(山本 1993)

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英次記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 228

曾利遺跡 ～長野県諏訪郡富士見町

平澤 愛里

今回は、私の職場である富士見町井戸尻考古館の下に眠る遺跡、長野県諏訪郡富士見町の曾利遺跡について紹介する。私は2年前、令和3(2021)年の4月に井戸尻考古館に配属され、現在は学芸員業務と文化財に係る業務を行っている。そんな私が初めて調査員という立場で発掘に携わったのが、曾利遺跡の第10次調査である。

曾利遺跡は長野県諏訪郡富士見町境の池袋区、八ヶ岳南麓の裾野が百百川に削られてできた尾根状台地の標高約870m地点に位置する。八ヶ岳南麓には、井戸尻・藤内・九兵衛尾根などの著名な遺跡が集中し、これらは「井戸尻遺跡群」と総称されているが、曾利遺跡はこれの中でも中核を担う遺跡の1つである。遺跡の南には甲斐駒ヶ岳や鳳凰三山といった南アルプスの山々が連なり、南西には富士山を望むことができる町内有数の景勝地でもある。

昭和35・36年に郷土の考古学者藤森栄一氏の指導のもと組織的な発掘が行われた第1・2次調査により、八ヶ岳南麓地域における縄文時代を代表する極めて重要な遺跡であることが確認された。17軒の竪穴住居を調査し、数々の土器が出土した。のちに官製はがきの印面意匠に採用されるなど広く親しまれることになる「水煙渦巻文深鉢」もこの時出土したものである。成果は、大著『井戸尻』(1965)にまとめられ、出土した土器は「曾利式土器」の標式資料となって学史に名を残している。その後、昭和44年の収蔵庫建設に伴う第3次調査、昭和48年の井戸尻考古館建設に伴う第5次調査など、11次にわたる発掘調査が行われてきた。

現在は、重要遺跡として保存していく下準備として、遺跡の範囲や内容の確認調査を令和3年度より3年計画で行っている。この1年目となる第10次調査は、遺跡の北側に隣接する縄文時代後期の集落大花遺跡の南端と、曾利の集落の北のずれを明確にすることを主眼として行った。

令和3年5月15日から6月30日の1か月半の間、先輩調査員の方々の指導のもと、ひよっこ調査員の私は、悪戦苦闘しながら調査に臨んだ。毎日バタバタ駆け抜け、終わりが見えたのは調査最終日、6月29日の午後の事だった。凶面を書き上げて一安心し、次の日の埋め戻しに備え、調査の仕上げとしてセクションにかかった遺物を取り上げる作業を行っていた。

そして最後の最後、ことは起こった。大先輩調査員の命により、セクションから顔をのぞかせたこぶし大の緑色の結晶片岩と、同じくこぶし大の安山岩を掘り出すことになった私は、作業員さんと2人横に並び、移植ゴテを片手にタヌキ掘りをしていた。顔をのぞかせているのはこぶし大の石2つ。普通で



▲最終的な出土状況



▲最終日、出土した土偶と

あれば容易に掘り出すことが出来るサイズである。しかし掘り出すことができない。石は奥へ奥へと続いていくのである。30分ほど奮闘するも掘りあがらず、この2つの石の全容を確認するため急遽トレンチを拡張することとなった。2つの石は最終的に、それぞれ長さ70cm程の痩せたアザラシが2匹並んだような姿に様変わりした。そして2本の石の傍らから、ぽっかりと口を開けた土偶の頭部が姿を現した。

これらは、縄文時代に行われた何らかの祭祀に用いられたものだと推察される。火山岩質の八ヶ岳南麓の大地には本来存在しない緑の結晶片岩は、縄文人が向かいの南アルプスの方へ行き、持ち帰ってきたのだろう。重い石を、「えっちらおっちら」と一心不乱に坂をのぼって運ぶ当時の人々の様子が脳裏に浮かんだ。今回の調査ではこれ以上周囲の状況や性質を確認することはできないため、位置を記録し2本の石はそのままの状態で地面に埋め戻すこととなった。

この発見は今回の調査の主眼となる部分ではないが、私にとっては身近な曾利の地に未だ正体不明の遺物が眠っているということを強烈に意識するきっかけとなった。そして自身の掘った「へんてこ」な遺物は、遺跡やそこに暮らした人々に愛着を抱くきっかけともなったのである。令和4年度には集落の西のずれを確認する調査を行い、最終年度となる今年はいよいよ集落の中心部の調査を行う。今後の発掘・整理作業とその分析を通して集落の性格を見極めるとともに、曾利遺跡を未来へ伝えていくための保存・活用方法を職員一丸となって模索していく。

私は、井戸尻考古館の所在する富士見町で生まれ育った。思い返せば、私が考古学に興味をもつようになったきっかけの1つには、小学生の時に初めて訪れた井戸尻考古館での体験があった。ただ、当時はまさか自分が井戸尻考古館で働き、その下に眠る遺跡を調査することになるとは思ってもみなかった。

文化財行政に携わるものとして、郷土の歴史・文化を守り、次世代につなぐ仕事ができる幸運に感謝しながら、曾利遺跡をはじめとする町の様々な文化財を通して、自身が地域に対し何をすることができるか、考えていきたいと思う。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは堀川洸太郎さんです。



▲奥へ奥へとびる石

考古学者の書棚

「続日本先史考古学史の基礎研究 ー山内清男の学問とその周辺の人々ー」

大村裕 著／六一書房(2022)

土井 裕介

はじめに

本書は著者がこれまでに執筆してきた山内清男の研究に関する論文集である。タイトルのみをみると縄紋時代や山内の研究に関心がある人向けに思われるかもしれないが、著者の論文から論文の書く時のポイントを読むとすることもできると筆者は考えた。そこで新学期がはじまる4月1日に発行されることから、考古学に関する卒業論文を書こうと思っている大学生や卒業論文の作成で悩んでいる学生にむけて、今回本書を紹介することとした。

おすすめする理由

1つ目は、読みやすい文章と論文の構成がわかりやすいからである。「I. 山内清男の「縄紋」研究について」では1つの論文の中で細かい章分けがされており、飽きることなく読み進めることができる。このように読みやすい論文を数多く読むことで論文を読むことに対する抵抗感がなくなり、より卒業論文執筆へのハードルを下げるのではないだろうか。

また、論文は「はじめに」で研究史と何を明らかにしたいかを記述し、「分析」では資料を分析し、「結果」では分析結果から何がいえるのかを述べ、「おわりに」でまとめるという構成である。例えば「II. 山内清男の「阿玉台式土器」について」などがわかりやすい。

2つ目はなぜ先行研究を集めなければならないのかわかるからである。もちろん大学で教員から先行研究を集める理由は聞いているだろう。しかし、「VI. 山内清男と森本六爾ー「石庖丁」の用途論をめぐるー」では森本六爾によるプライオリティの侵害の過程について論じられており、この章を読むことで先行研究を収集し、研究史をまとめることに対する考え方が変わるはずである。

また「IX. 山内清男はW・Eニコルソン「北部ナイジェリア、ソコト地方の焼き物師」(『MAN』29巻1929年3月号)をどう評価していたのか?」では、山内がニコルソンの論文を参考に縄紋の施文方法を発見したのかについて論じられており、本文中にもあるように山内がニコルソンの論文を読んでいたならば参考文献等で掲載していれば、誰からも他人の論文から発想を得たという批判は出なかったはずであり、縄の回転施文と斜行縄紋の施文方法は山内が発見したことが明らかにできる。このように先行研究を掲載していなかったことでどちらがプライオリティを有するのかが問題になるだけでなく、現代であれば盗用として問題になる。先人たちの過去の過ちを教訓として我々は生かすことができる。筆者は先行研究を集め、まとめる作業はこれまでその研究を進めてきた研究者たちへ敬意を払い、自らが述べたいことの研究史上の位置づけを行

うために重要な作業であると考えられるようになった。

3つ目は先行研究を批判的に読むために必要な見方がわかるからである。先行研究を批判的に読む際に重要なことは研究方法に問題点がないかや、論が飛躍していないかなどを確認することである。「III. 佐藤達夫「土器型式の実態 ー五領ヶ台式と勝坂式の間ー」における阿玉台式土器について ー山内清男の土器型式概念との比較も兼ねてー」では佐藤の型式区分の定義と問題点について論じている。佐藤が阿玉台I b式を古式と新式に細分した根拠として文様の違いと層位であることを示し、実際の報告書を利用して、著者はまず、2つの土器の文様を確認し、型式細分したことが妥当であったかを検討し、次に報告書の該当住居に関する文章から覆土が堆積するまでの時間差を読み取っている。そこから覆土は大きな時間差がなく堆積していることから土器の新旧を分ける根拠として層位は不十分であるとしている。このように論文を読み込み、論文中の報告書にあたることで先行研究の問題点や現状の課題等がみえてくる。

4つ目に理解しやすいように適宜、表や図を交えながら説明があるため、文章のみを読んで理解しにくい箇所はそれらを活用することで読みやすくなっているためである。例えば「IV. 「縄紋時代の時期区分」と「縄紋土器型式の大別」の違い ー「後期に下る加曽利E式」という用法は正しいのか?ー」では、山内がどのように土器型式の大別をとらえていたかについて論じられている。山内が発表した論文等から該当箇所を抜粋した文章が表にまとめられている。文章を読みすすめて、一覧表を見ることで土器型式を大別した意図や山内がいつから両者を混同するようになったのかを理解する助けとなっている。こうした点は卒業論文においてどのように図や表を用いるかのヒントとなりそうである。

最後に

今回は卒業論文を執筆する大学生を対象に、本来の出版された意図とは異なる、論文の構成や先行研究をどのように読み進めればよいかなど論文を書く上で重要と思われる視点から紹介してみた。縄紋時代の遺物や遺構をテーマにしていないう学生であれば、異なる時代の本書を読むことは新鮮に感じられるかもしれない。考古学の論文の書き方という点ではどの時代のモノをテーマとしていても参考になる部分はきっとあるはずである。今回の紹介が卒業論文の作成に悩んでいる学生の一助となれば幸いである。

アルカ通信 No.235

発行日	2023年4月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL: 0267-25-0299 aruka@aruka.co.jp URL: http://www.aruka.co.jp